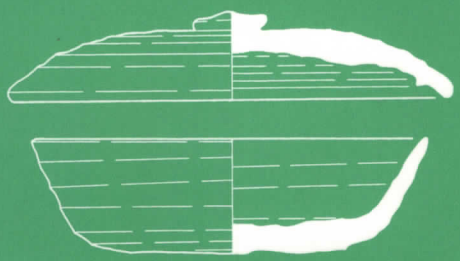
和島村埋蔵文化財調査報告書第 9 集

下ノ西遺跡 III



2000

新潟県和島村教育委員会

和島村埋蔵文化財調査報告書第９集

下ノ西遺跡 III

２０００

新潟県和島村教育委員会

序

和島村では、「沼垂城」と書かれた木簡が出土した国指定史跡八幡林官衙遺跡をはじめ、縄文時代の組み合わせ式石斧柄が発見された大武遺跡、平安時代中期の開発領主の居宅とみられる門新遺跡など、重要な遺跡の発見が相次いでおります。

大字小島谷に所在する下ノ西遺跡は、そのような全国的に注目される遺跡のひとつで、平成８年度に最初の調査が行われました。これまでの調査では、全長20mを超える巨大な掘立柱建物や、完数値による計画的な建物配置、大規模な饗宴の開催を物語る土器廃棄土坑、馬骨が投入された井戸など注目される遺構が検出され、遺物においても刑罰の情景を描写した絵画板や、役人の二重帳簿木簡の出土で話題を呼び、八幡林遺跡とともに古代古志郡の支配に関わる重要な遺跡であることが明らかになりました。

本年度は、道路法線以外にも調査区を広げることで、遺跡の広がりと遺構確認面までの深度を明らかにし、今後予定されている圃場整備において，可能なかぎり遺跡が保護されるための基礎データを得ることを目的に、文化庁の補助金をいただき、４月から調査を実施したものであります。

その結果、７世紀後葉～10世紀にかけての多数の遺構・遺物が検出され、特に７世紀後葉に掘削された区画施設とみられる大規模な溝の存在や、円面硯・軒丸瓦などの出土は、特に注目されます。

本遺跡の示す内容は、古代における地方支配を知る上で極めて重要な情報であり、これらの成果を報告する本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

なお、この発掘調査にあたって、文化庁・新潟県教育委員会からは、適切な御指導をいただき、また実際の作業につきましては、地元和島村の有志の方々に、長期間にわたっての御協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成12年３月

和島村教育委員会

教育長　　下　村　孝　一

例　　言

1　本書は、新潟県三島郡和島村大字小島谷字下ノ西に所在する「下ノ西遺跡」の確認調査報告書である。

2　本事業は、文化庁の補助金を得て、和島村教育委員会が主体となって実施した。

3　注記は「99下西」とし、ほかに調査地区・出土遺構名・層序等を記した。

4　遺物は和島村教育委員会が一括保管している。

5　遺構の名称については、掘立柱建物以外は通し番号とした。

6　遺構実測図は業者委託とし、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。

7　整理作業は、調査担当・調査員を中心に下記のメンバーの協力を得た。

小田富美子・久住幸江・近藤保・関川たづ子・高橋智子・早川雅子・山口八千代（五十音順）

8　本書の編集・執筆は調査員・遺物整理員の協力を得て、調査担当者が行った。

9　調査体制は、次のとおりである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
調査担当	和島村教育委員会	田中　靖	（主任）
調査員	〃	丸山一昭	（主事）
事務局	〃	藤井賢計	（事務局長）

10　発掘調査については、村内の有志の協力を得て実施した。また、発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々にご教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

相沢　央・牛川喜幸・春日真実・金子拓男・北野博司・北村　亮・小林昌二・坂井秀弥・笹沢正史・澤田　敦・関　雅之・高橋　保・高橋　勉・坂井秀弥・寺崎裕助・寺村光晴・戸根与八郎・平川　南・藤巻正信・藤森健太郎・松村恵司・山中　章・山本　肇（五十音順）

目　　次

序
例言
目次
挿図目次
図版目次
第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1
　1　現在までの経緯……1
　2　平成11年度調査の経過……1
第Ⅱ章　発掘調査の概要……4
　1　基本層序……4
　2　検出された遺構……5
　3　検出された遺物……9
第Ⅲ章　ま　と　め……15
　1　遺構について……15
　2　土器について……16
第Ⅳ章　調査成果要約……17
　1　遺構について……17
　2　遺物について……17
引用・参考文献……18
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　周辺の遺跡分布図……3
第2図　調査区土層柱状図……4
第3図　SD400・411および関連遺構模式図……8
第4図　器種分類……11
第5図　各期の食膳具……16

図　版　目　次

（図面図版）

図面１　調査区位置図……20
図面２　Ⅲ区１遺構平・断面図……21
図面３　Ⅲ区２・３遺構平面図……22
図面４　遺構平・断面図……23
図面５　遺構平・断面図……24
図面６　出土遺物……25
図面７　出土遺物……26
図面８　出土遺物……27
図面９　出土遺物……28
図面10　出土遺物……29
図面11　出土遺物……30
図面12　八幡林・旧北辰中学校瓦窯跡出土瓦……31
図面13　旧北辰中学校瓦窯跡出土瓦……32

（写真図版）

図版１　下ノ西遺跡全景（北→南　南→北）……33
図版２　Ⅲ区１～３空中写真……34
図版３　Ⅲ区２　SB29・SX473　Ⅲ区３　SB30……35
図版４　Ⅲ区１　SB31　Ⅲ区２　SE421・447土層断面……36
図版５　Ⅲ区２　SE422土層断面、同　上面礫出土状況、同　完掘状況……37
図版６　Ⅲ区１　SD400、同　甕出土状況、同　提瓶……38
図版７　Ⅲ区１　SD400土層断面、同　SK408、Ⅲ区２　SK430……39
図版８　Ⅲ区３　P－802遺物出土状況、Ⅲ区１　平瓶、同　緑釉……40
図版９　出土遺物……41
図版10　出土遺物……42
図版11　出土遺物……43

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

1．現在までの経緯

下ノ西遺跡は、島崎川低地の中の微高地上に立地し、島崎川と小島谷川・梅田川・保内川の合流点を前面に控え、詳細なルートは特定されていないが、古代の幹線道路である北陸道が付近を通過するなど、水・陸上交通の要衝の地に立地する古代遺跡である。

近年、本遺跡の中央を縦貫するJR越後線に添って、村道（小島谷・辺張線）が計画されたために、和島村教育委員会では平成８年度に事前の発掘調査を実施することになった。同年の調査では、桁行７間級の巨大な掘立柱建物や、1,000個体を超す土師器椀の廃棄土坑、幅５～5.5mを測る道路跡など、奈良～平安時代にかけての重要な遺構が発見された。これらの様相は、一般集落のそれとは大きく異なり、何らかの公的施設あるいは郡司級の居宅である可能性が強まった。

この調査成果を受け、平成９～10年度に遺跡の具体的な性格を知るための確認調査を実施した。その結果、８年度調査区の隣接地点（Ⅰ区西）では９世紀台を中心に構築された15棟を超す掘立柱建物が明らかになり、その配置に綿密な計画性が伺えるなど重要な発見が相次いだ。また、遺跡の西端にあたるⅡ区からは、８世紀前葉の区画溝を伴う掘立柱建物と、木簡など多量の遺物が出土した。木簡には刑罰の情景を描いた可能性がある絵画板や、二重帳簿ともとれる出挙・国司借貸についての記録簡、「越後國高志郡・・・」と書かれた貢進物付け札などがみられ、特に後二者は郡務に関わる重要事項であることから、本遺跡が古志郡衙関連施設であることが確実となった。

本年度は、遺跡を含む一帯で県営圃場整備事業が計画されたことを受け、遺跡の広がりや遺構確認面までの深度等、遺跡を最大限保存するための基礎データを得ることを目的に、調査範囲を村道用地外にも広げて調査を実施した。

2．平成11年度調査の経過

本年度の調査は平成11年５月７日に着手した。作業手順としては、Ⅲ区を現水田の区画割りで１～３の小区に分け、Ⅲ区１からバックホーによる表土除去を行なった後、人力による包含層掘削、遺構確認作業を実施した。またそれと並行して、平成９～10年度に調査を実施したⅡ区の北東側（Ⅳ区）および、遺跡発見の契機となった旧村営プールに近い山際（Ⅴ区）にもトレンチを設定した。

（Ⅳ区）　５月13日から17日にかけて、試掘調査を実施した。その結果、Ⅱ区と同時期（８世紀前葉）の遺構・遺物がわずかに検出され、鉄道によって分断されているため詳細は不明だが、Ⅳ区とⅡ区は一連のものである可能性が高まった。注目される遺物として、１Ｔから円面硯の破片

が出土している。

（V区）　8月4日～8月9日にかけて試掘調査を実施した。全てのトレンチから遺構・遺物が検出されたが、最も山際の水田においては、過去の圃場整備で大きく削平を受け、遺跡の保存状態は不良であった。

検出遺物は、7世紀後葉～8世紀前葉と9世紀台の2時期に大別される。

（III区）　5月12日～8月4日にかけて面的な調査を実施した。

最も線路側のIII区1では、東西方向に伸びる大きな溝SD400および、それとは弧を描いて接続するSD411（9年度調査の区画溝SD301の延長？）、小溝・ピットなどが検出された。SD400・411に囲われた内側には、建物を構成するような大型のピットはほとんど見られず、多数の掘立柱建物が検出されたI区とは様相が異なっていた。

続いて遺構確認を行なったIII区2では、掘り方が1m四方もある2間×5間の大型の掘立柱建物が1棟と、井戸と思われる円形の大きな落ち込み、溝・ピット等を多数確認したが、掘立柱建物としてとらえられたのは前述した1棟のみであった。なお、IV－1－16グリッドから本遺跡では初めて軒丸瓦の破片が出土した。

最後に遺構確認を行なったIII区3では、大型の掘立柱建物1棟とピット・溝等が検出された。しかし、これまでの調査区と比較して遺構数・遺物量が激減することから、下ノ西遺跡の四至の一端を示すものと推定された。

前述した主要遺構については、その所属時期を特定するために、遺構の断ち割り等も連続して実施した。その結果、SD400・411および2棟の掘立柱建物、土坑数基などが7世紀末から8世紀初頭、その他の遺構は9世紀台に位置づけられることが明らかになった。

8月12日、文化庁の坂井秀弥調査官から検出遺構・遺物についての現地指導をいただき、下ノ西遺跡の重要性が再確認された。

8月24日には、これまでの調査成果を受け、遺跡の取扱について長岡農地事務所と協議を行なった。その結果、遺跡の重要性に理解が得られ、田面高を当初計画より引き上げ下部遺構をできるかぎり盛土保存することとなった。

なお、水路敷として変更できないV区の山際等については、9月以降に本調査を実施することで合意を得た。

9月～11月前半にかけてV区山際の本調査を実施、並行してIII区の補足調査を行なった。その結果、新たな掘立柱建物等が確認された。

11月18日、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施。以後、天候の合間をぬって遺構の砂入れ（人力）とバックホーによる埋め戻し作業を行い、12月9日もって本年度の現場作業を終了した。

和島村周辺の主な遺跡・地名表

No	遺跡名	種別
1	上向遺跡	遺物包含地
2	諏訪田遺跡	〃
3	京田寄割遺跡	〃
4	横滝山廃寺跡	〃
5	小谷地割遺跡	〃
6	五分一稲場遺跡	〃
7	上桐神社裏遺跡	〃
8	大平遺跡	〃
9	中道遺跡	〃
10	奈良崎遺跡	〃
11	大塚遺跡	〃
12	釜の沢製鉄跡	製鉄跡
13	山田郷内遺跡	遺物包含地
14	八幡林遺跡	〃
15	門新遺跡	〃
16	旧北辰中学瓦窯跡	瓦窯跡
17	下ノ西遺跡	遺物包含地

第1図　周辺の遺跡分布図

第II章　　発掘調査の概要

1．基本層序

第２図は、平成11年度調査区の基本層序を土層柱状図で表したものである。III区のそれは、昨年度まで調査したＩ区とほぼ同一であった。IV区の層序もIII区からの連続性がうかがえ、基盤は非常に安定していた。この状況は、線路を挟んで南西側に隣接するII区とは対照的で、調査前の予想に反するものであった。山際のＶ区については、長岡農地事務所の費用負担で平成11年９月～12月にかけて本調査が実施されており、同区の層序は平成12年度刊行予定の報告書で記述するものとする。

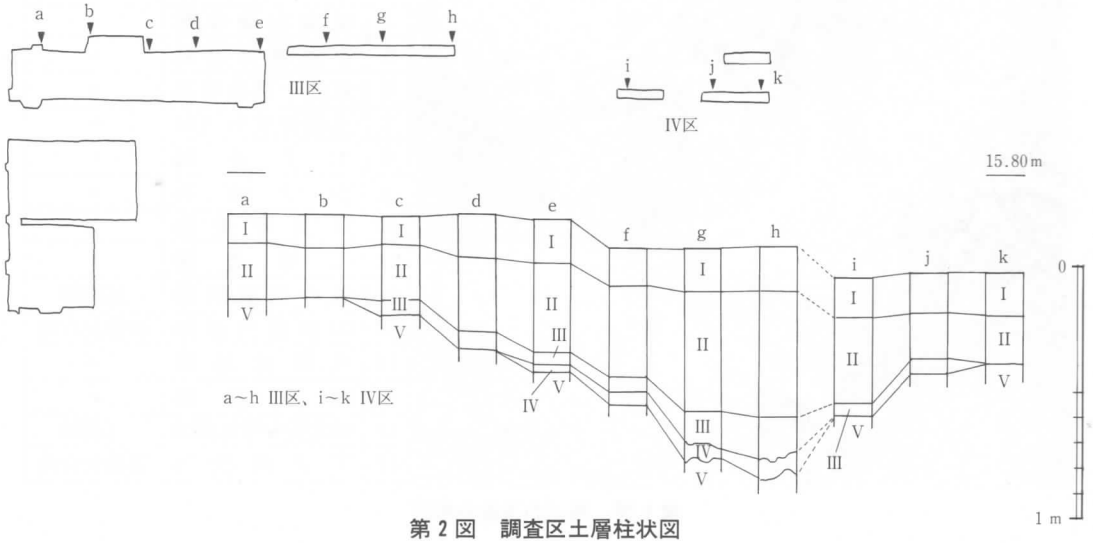
Ⅰ　層　　水田耕作土

II　層　　暗灰色土で粘性が強い。古代～近世の遺物が、散発的に出土する。

III　層　　暗灰褐色土で炭化物粒を多く含み、古代の遺物を包含する。III区１のcからIV区１Ｔのj付近まで安定して存在する。

IV　層　　灰褐色土で粘性が強く、奈良時代以前の遺物を主に包含する。III区１のcからhの間で確認でき、g～h間では上下のIII・Ｖ層との境界が大きく波うつ。これらは人為的な踏み込みに起因する可能性が高く、畦畔を捉えることはできなかったが、水田跡の存在が予想された。

Ｖ　層　　灰白色土でしまりがある。強い還元状態にある所では、青灰色を呈する。III区１のb以西および、III区２・３ではシルト質であるのに対し、b以東では粒子が細かく、強い粘性を示す。



第２図　調査区土層柱状図

2．検出された遺構

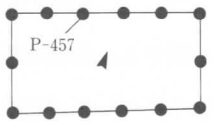
以下では、面的に調査したIII区検出遺構の主要なものについて概要を述べる。IV・V区については、小規模なトレンチ調査であったことと、遺構内部を調査していないことから、本項では除外する。

a．掘立柱建物（図面２～３）

今回の調査では、新たに３棟が検出された。

SB29

梁間２間（5.0m）×桁行５間（9.5m）の東西棟である。建物の主軸方向はN－21°－Wを向く。柱の掘り方は、一辺100～140cmを測る方形を呈するものが多いが、北側柱列の一部は連結して掘られ布掘り状を呈する。柱穴のうち４個には明確な抜き穴が観察され、柱は抜き取られたものと推定される。



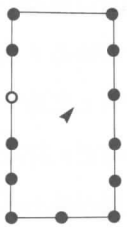
SB 29

本建物の所属時期は、柱抜取り穴（P－457）上面から図面８－36の須恵器無台杯が出土していることから、８世紀初頭以前に位置づけられよう。

SB30

梁間２間（5.2m）×桁行５間（10.5m）の南北棟であるが、北妻の柱穴を確認できなかったことから、建物がさらに北の調査区外にのびる可能性もある。建物の主軸方向はN－36°－Wを向く。

柱掘り方は、直径100cm前後の方形を呈するものが多いが、西側の柱列については、やや不整形で一部検出できなかった柱穴もある。柱痕跡や明確な抜き取り穴は確認できなかった


SB 30

本建物の所属時期は、柱穴内部から時期を明示する遺物が出土しなかったため詳細は不明だが、柱穴の覆土が前述したSB29に近いことから、同建物と近似した時期に構築された可能性が高い。

SB31

東西方向に２間（3.6m）、南北方向で１間（1.8m）分が検出されたのみで、大半が道・水路敷に延びるため全容は不明である。主軸方向はN－８°－Wを向くものと推定される。柱掘り方は一辺50～60cmを測る方形で、柱痕跡は直径20cm前後の円形であった。

SB 31

柱穴内部からは土師器の小片が出土しているのみで、詳細な所属時期は不明である。主軸方向は平成９年度報告書（和島村1998）のC群に近い。

b．井戸（図面４）

III区２において、４基が検出された。

SE420

直径（上場）2.0m・深さ1.3m以上の、円形の素掘り井戸である。覆土は５層が確認され、各層ともに地山土ブロックの混入が著しく、人為的に埋め戻されている可能性が高い。覆土からは、小泊窯産の須恵器およびロクロ土師器の小片が出土している。

SE421 直径（上場）1.5m•深さ0.8mを測る、円形の素掘り井戸である。覆土は5層に細分されるが、各層には地山土（青灰色土）ブロックの混入はほとんどなく、他の井戸とは様相が異なる。確認面から－55cmの深度から小児の頭大の礫が出土しており、この礫投入は埋井の祭祀に関連する可能性もある。このほか覆土からは、小泊窯産の須恵器およびロクロ土師器の小片がわずかに出土している。

SE422 直径（上場）2.5m•深さ1.5mを測る、円形の井戸である。本井戸は、確認面から－50cmの位置に段を持つ、いわゆる二段掘り状を呈する。底面には直径50cm・高さ28cm・厚さ3㎜の曲げ物が水溜として据えられている。

覆土については図面4に見られるように、－70cmまで炭化物粒を含む黒味の強い土が堆積し、以下は青灰色土ブロックを含む暗灰色土を基本としている。

本井戸は、覆土の状況からみて人為的に埋められている可能性が高い。埋井にあたって何らかの祭祀が執り行われたものと推定され、覆土中層を中心に完形あるいは略完形の土師器椀・須恵器無台杯などが出土したほか、確認面より－50cmのレベルでは、拳大から人頭大の礫20点（総重量17.7kg）が一括投入された状況で検出された。礫には明確に焼けているものもあり、全体の40％を占める8点にそれが確認された。注目すべき出土遺物としては、SE203（平成10年度調査）出土資料と共通する「日」字を側面に記した墨書土器があり、この「日」字を墨書する行為は、埋井の祭祀に関連する可能性が強まった。本年度本調査を実施したV区SE669においても、同様の墨書土器が検出されている。

本井戸の所属時期は、廃絶時に投入された土器の年代観からみて、9世紀後葉を下限ととらえることができよう。

SE447 直径（上場）1.5m•深さ1.2mを測る、円形の素掘り井戸である。覆土 は4層に細分され、最上部には炭化物を含む黒灰色土がレンズ状に堆積する。以下の各層には地山ブロックの混入が顕著で、人為的に埋め戻されている可能性が高い。覆土の中層から、8世紀末～9世紀前葉頃の須恵器有台杯（完形）が出土している。

b．土坑（図面5）

III区1で1基、同区2で3基が確認された。以下では主要なものについて記述する。

SK408 長径（上場）2.6m•深さ約35cmを測る、不整方形の土坑である。覆土は3層に細分され、いずれも地山土より僅かに暗い色調の暗青灰色土を基調とする。覆土上層からは、7世紀末～8世紀前葉頃に位置づけられる土器が出土し、後述するSD400出土資料と接合関係を持つものも存在する。

本土坑はSD403•SD411と重複しており、その切り合い関係をみると、SD403よりは古く、SD411よりは新しい。

SK430　長径（上場）3.9m・深さ約40cmを測る、浅い皿状の土坑である。覆土は3層に細分され、土層の状況は前述したSK408のそれに近似する。内部からは、人頭大の礫が1点と8世紀初頭頃に位置づけられる土器が少量出土している。

SK494　長径（上場）5.4m・幅（同）2.2～0.9m・深さ約28cmを測る、溝状の土坑である。覆土は3層に細分され、内部からは完形の無台杯や内面に返りを持つ杯蓋などが出土しており、7世紀後葉頃に位置づけられる。

c．溝（図面2）

各区で大小多数の溝が検出されたが、以下では主要なものについてのみ記述する。

SD400　III区1において確認された東西方向の溝である。SD411との合流点付近に至って、わずかに南に折れる。規模は上場で幅1～1.3m・深さ40～70cmを測る。溝の覆土は、地山に近い暗青灰色土を基調とするが、時間の経過とともにやや暗い色調に変色し、地山との識別は容易であった。

溝の内部からは、覆土の下位を中心に完形品を含む多量の土器・銅製品（耳環）が出土した。出土遺物の年代は、7世紀中葉を下らないと思われる提瓶・透かしを孔をもつ高杯脚部を上限とし、最上面（溝確認面）で検出された8世紀前葉の杯蓋を下限とするが、主体は7世紀後葉～8世紀初頭段階の資料である。

溝の機能した時期は、おおむね出土遺物の年代幅の中に納まるものとみられる。しかし、上限については、周辺の遺構・包含層において、7世紀中葉を遡る資料がほとんど出土していない点や、提瓶など古い一群と、それに続く資料との間にブランクが大きすぎる点に問題がある。ゆえに、完形で出土した提瓶などを、伝世あるいは上流の古い遺構等からの流出品として捉え、溝の開削時期については、7世紀後葉まで下げて考えたい。

SD400の性格を考える上で注目されるのは、同溝の延長線がI区東の道路遺構（平成8年調査）と直交する点である。道路遺構の時期については、側溝からの出土遺物が少なく、9世紀中葉を下限とする以外あまり明確ではない。しかし、切り合い関係から最も古い道路側溝が、7世紀後葉～8世紀前葉の古い遺構のものと共通することや、その西側溝（SD06）から直角に分岐するSD85において、8世紀初頭～前葉の土器が出土している点は、道路の上限が8世紀初頭以前に遡る可能性を示している。道路とSD400が共存していたとすると、SD85・301（本年度調査のSD411と接続?）とともに、道路西側の一角を東西53m（約半町）・南北38m（約1／3町）の範囲で方形に囲うこととなり、これらの溝は土地の区画を意図して掘削された可能性が高まった（第3図）。溝に添って柵（SA03）が設けられているなど、区画内部に何らかの重要な施設があったものと推定されるが、中心部がJR越後線と現村道敷になっていることと、調査できた地点も9～10世紀前葉に構築された夥しい遺構群に覆われ、内容を明らかにすることはできなかった。

SD411

Ⅲ区１に所在する南北方向の溝で、SD400とは若干東にカーブを切りながら合流する。規模は幅（上場）で0.7～1.0m・深さ10cm前後を測る。

溝の覆土は、SD400と同様に地山に近い暗青灰色土を基調とするが、底面付近に炭化物に富む黒灰色土の薄い堆積がみられる。

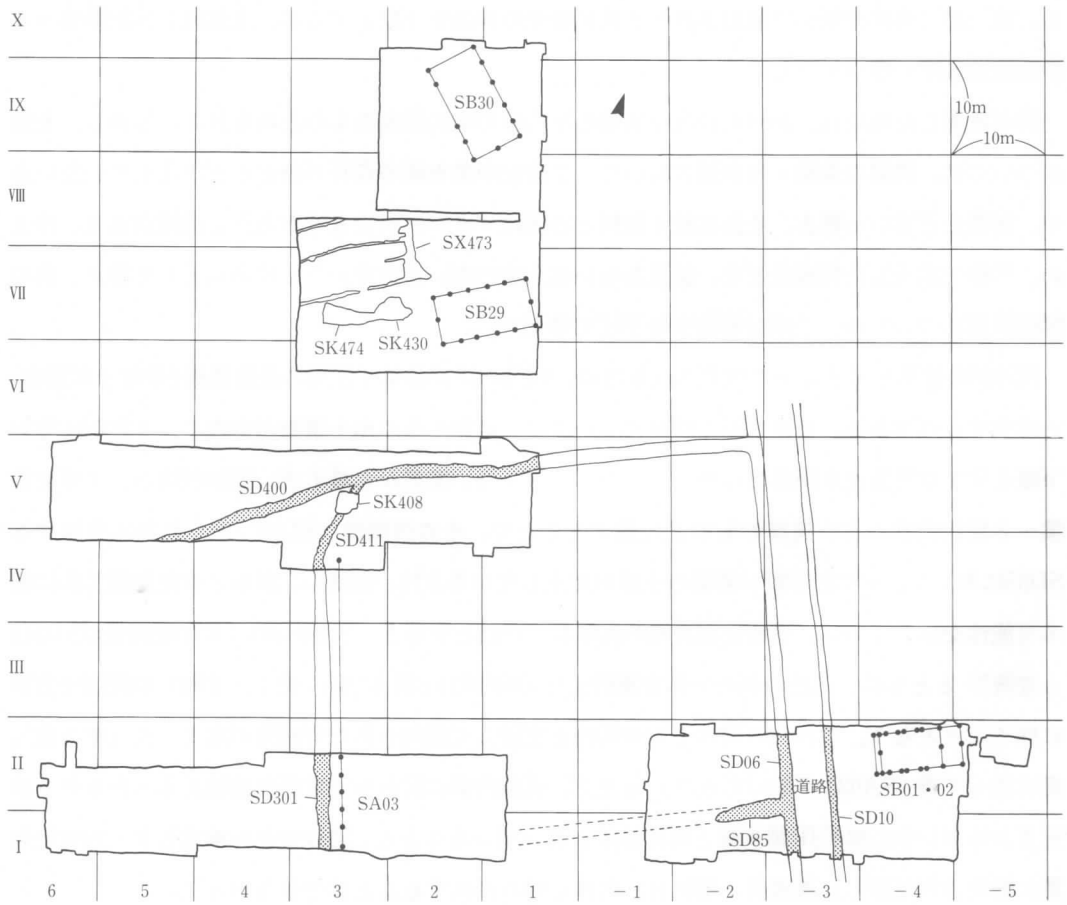
堆積土中からは、所属時期を明示できるような遺物は出土しなかったが、７世紀末～８世紀前葉の土坑SK408に切られていることや、SD400との合流点で明確な切り合い関係がみとめられなかったことから、SD400とは同時に機能していたものと推定される。

本溝の南の延長線上には、Ⅰ区西のSD301（平成９年調査）があり、溝幅・覆土などに共通性があることから、両溝は同一のものである可能性が高い。

ｄ．その他の遺構（図面３）

道路遺構

Ⅲ区１～３にかけて検出された南北に伸びる道路である。SD423・424および、SD425で構成され、前者が西側溝、後者が東側溝となる。道路の規模は、幅３～3.7m（側溝の心々距離）で若干ばらつきがあるが、総延長約49mが確認された。道路の方向は、Ⅰ区東で検出された道路（平成８年調査）と一致する。



第３図　SD400・411および関連遺構模式図（７世紀後葉～８世紀前葉）

西側溝SD424は、幅30～60cm・深さ約20cmを測り、断面は「U」字形を呈する。覆土は灰褐色土の単層で、9世紀後葉頃の須恵器（佐渡小泊窯産）などが出土している。本溝は、III区2から同3の間で約11mにわたって途切れており、出入口となる可能性もあろう。

SD423は、SD424よりわずかに西にずれて確認されたもので、切り合い関係をみると、SD424→SD423（古→新）である。

東側溝SD425は、規模・形状ともに西側溝のそれとほぼ同一である。やはり部分的に溝が途切れる個所があるが、間隔は短い。

本道路が機能した時期は、出土遺物が細片（周辺からの流れ込み？）に限られ、明確にすることはできないが、掘立柱建物SB29の柱穴を本溝が破壊していることから、8世紀初頭を遡ることはない。さらに、I区東の道路とは約29mの距離（道の心々距離）で並行し、間隔の狭さから同時に機能していたとは考えにくく、I区東の道路廃絶（9世紀中頃）後に、位置を西に移して設置された可能性が高い。

SX473

III区2で検出されたもので、東西方向に走る平行な4本の溝と、それと東端で直交する南北方向の溝で構成される。西側が調査区外に伸びるため全容は不明だが、溝で囲われる範囲は、東西13.8m以上・南北8.0mである。

個々の溝は、東西溝が幅30～40cmでほぼ均一であるのに対し、南北溝は幅40～280cmでばらつきがあり、特に西縁の凹凸が著しい。深さは両溝ともに10cm前後と浅く、断面形は「U」字形を呈する。

SX473は、隣接するSB29と長軸方向が一致し、出土遺物からも両者は同時に存在した可能性が高い。溝で囲われた内側には、おびただしいピットが存在し、建物としてまとめることはできなかったが、何らかの建造物が存在していた可能性が高い。

3．検出された遺物

本年度調査での出土遺物量は多く、V区の本調査分を除外しても、コンテナで80箱以上に達する。調査終了後の短い整理期間では、水洗作業を完了し注記作業を1／3終えるのがやっとの状態であった。そのため、今回掲載できたのは、調査時に抽出・復元・実測を行なっていたものがほとんどで、SD400など7世紀後葉～8世紀前葉にかけての遺構の資料や、SB29・30、SX473周辺の包含層から出土した同時期の資料に偏っている。実際は、9世紀以降の資料も定量存在するのであるが、接合・実測作業が進んでいないため本稿には載せられなかった。

一方、7世紀後葉～8世紀前葉の資料については、本年度調査区の中心をなす時期であることから、できる限り掲載に努めた。任意抽出しているために器種に偏りがあることや、土師器の遺存状態が悪く、一部を除きほとんど図化できなかった点など問題も多いが、県内では良好な資料が乏しい時期だけに、空白を埋める貴重な資料といえる。

(a) 出土土器

掲載した土器の器種は、第4図のように分類される。各器種は、法量等の違い・形態差からさらに細分可能であるが、整理作業が完了していないため、現状では大枠の分類にとどめた。以下では、器種別にその概要を述べる。

（須恵器）

杯 H 身に蓋受け部を持つ古墳時代タイプの蓋杯である。III区では、蓋が1点（39）のみ出土しただけで杯身の方は確認できなかった。参考として、セットとなりうるV区出土の資料（40）を掲載した。

40は、口径が極めて小さく（8.1cm）口縁の立ち上がりも形骸化している点など、杯Hが消滅する直前の段階とみられる。

杯 G 口径と比較して器高が高く、底部は丸底気味となる。法量は、口径8～11cm・器高3.5～4.5cmを測るものが主体である。

杯Gとセットになる杯蓋は、41～55などのうちの一部があてられよう。型式的には、古新2段階程度に細分が可能で、宝珠形つまみを持つ小型のものと、つまみが偏平化した若干大型のものが存在する。返りの形状はバラエティーに富む。

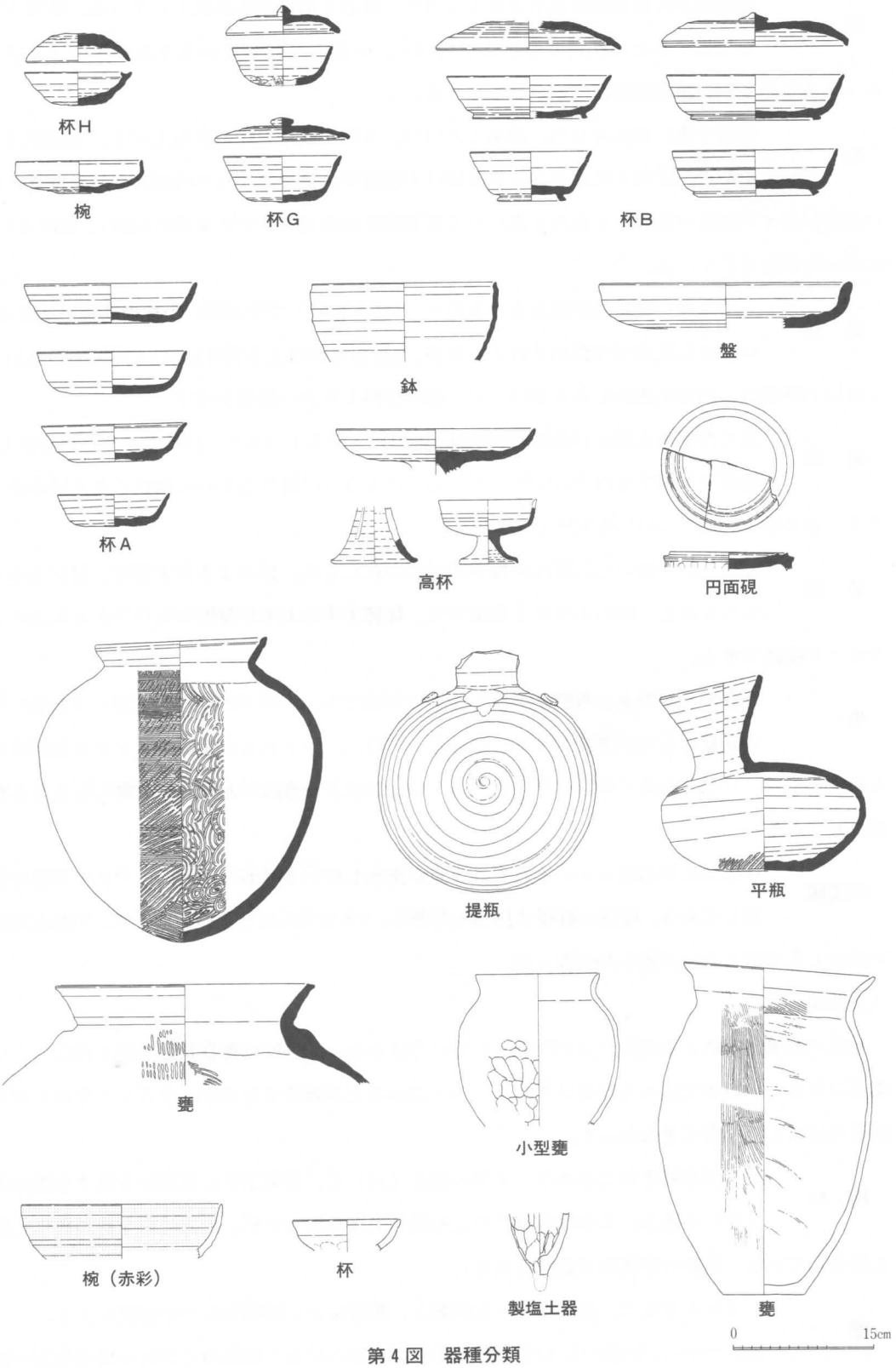
杯 A 高台を持たない杯のうち、杯Gを除いたもので、口径10～16cm・器高3～4cmを測る。底部から丸みをもって立ち上がる資料が主体だか、口縁が「ハ」の字に大きく外反する（35～36•87）ものもある。杯Aは、基本的には蓋を持たないが、SK494から出土した26など、口径10～11cmを測る小型の一群には、前述した杯G同様に返りを持つ杯蓋が伴う可能性がある。

杯 B 高台を持つ杯である。口径が15～17cmを測る大ぶりなものと、11～12cm程度の小型のものとが確認できる。72・76は、外面に1・2条の沈線が施されるもので、76は身が深いタイプとなろう。

高台は、口縁部と底部の境よりわずかに内側に付けられるものが主体だが、77・83のように大きく内側に入る例も存在する。高台の形状は全体的に太く、内端が接地するもの（71～73など）、外端が接地するもの（79•81）、ほぼ水平に接地するもの（78•82）があり、中でも81～82は、「ハ」の字形に踏ん張る高い高台をもつ。

杯Bの蓋は、口縁端部が下方に折れるものが主体をなし、返りを持つ杯蓋のうち大型の24・62～63もセットとなる可能性が高い。器高が低く天井部が平坦な前者に対し、後者は側面が山笠形となる点で異なる。つまみまで完存するものは少ないが、低い擬宝珠形のもの（64・67）と、つぶれて偏平化したもの（68～70）がみられる。

椀 内傾する口縁と丸底気味の底部を持つ。図示した6以外では、III区2で1点（口縁部を欠く）、V区で1点が確認されているのみである。6は焼成時の変形で大きく歪



第4図　器種分類

んでおり、本来もう少し器高が高かった可能性もあろう。

鉢　口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、31の１個体のみが出土している。体部下半を欠損するため底部の形状は不明だが、口径と比較してかなり身が深いプロポーションとなろう。口縁端部は、内削ぎ状を呈する。

盤　大型で浅い皿状のもの。図示した14は、口縁が直立気味に立ち上がり、口径23.8cmを測る。底部を欠損するため詳細は不明だが、底部のかなり内側に入った位置に高い高台が付く可能性があり、本器種と思われる底部破片が数点（いずれも高台剝落）、III区２・３において検出されている。

高　杯　大型で浅い皿状の杯部をもつものと、口径と比較して身が深い小型の高杯とがある。いずれも数点づつ検出されているが、全形をうかがえる資料はない。SD400から出土した12の脚部は、三方に透かし孔を持つなど、他の資料より古い様相を示す。

提　瓶　立てた偏球上部に口縁が付加され、両肩に吊手をもつもの。18の１点のみが出土し、端部を欠損する以外は完形であった。本来ならば環状あるいは鉤状をなす吊手が、ボタン状の粘土粒貼りつけに形骸化している。

平　瓶　偏球上面の偏った位置に口縁部が付加されたもの。15のように大型で、肩に丸みをもつものと、97のように小型偏平で、体部下半と上半が明瞭に区分されるものの２タイプが確認できる。

甕　全容がうかがえる資料が少なく詳細は不明だが、小型（33）・中型（32）ほか幾つかの法量のものが確認できる。図示した資料は、いずれも口縁部がシンプルな形状のものであるが、口縁部が長く伸び、外面に凸帯・櫛描波状文を数段にわたって加飾したものも検出されている。

円面硯　IV区およびIII区３からそれぞれ１点が出土している（99～100）。いずれも脚部を欠損しており、硯部の直径は12.5cmを測る。100は脚部破断面の観察から、円形と方形の透かし孔が巡ることが明らかになった。

（土師器）

過去の圃場整備による攪乱および埋没条件等の理由から、全体的に保存状態が悪く図化できた個体は少ない。以下で述べる器種以外にも、甑・高杯などが確認できるが、前述した理由と復元作業の遅延から掲載できなかった。

椀・杯　内外面赤彩された身の深い大型の椀と（10）と、体部下半に指頭痕を残す小型の杯（37）がある。このほか細片のため図示できなかったが、内面に稜を持つ黒色土器も出土している（高杯の杯部の可能性もある）。

甕　いずれも平底で、長胴の中・大型甕と、球形に近い体部を持つ小型甕がある。長胴の中・大型甕には、口径と体部最大径の差が少なく頸部のくびれが顕著な19～20

と、それがルーズで深鉢に近い形状を示す21～22の２種類の器形が認められる。

小型甕（23）は、頸部が「く」の字にくびれ最大径を体部中央付近にもつ。器面調整は、中・大型の甕に刷毛調整が多用されるのと対照的に、ナデ調整である。

製塩土器　いわゆる能登式の製塩土器で、平成８年調査時に１点のみ出土している。101は尖底部の破片で、端部の棒状突起を欠損する。新潟県内における能登式製塩土器出土地としては、刈羽大平遺跡に次いで２例目となろう。

(b)　出土瓦

本年度の調査では、総数17点（約2.6kg）の瓦が出土し、過去３ヵ年の調査分を合わせると、42点（約7.1kg）に達する。

瓦の出土状況としては、Ⅰ～Ⅴ区を通じて特別な集中は認められず、新しい時期の遺構覆土や包含層中に散漫に含まれていた。このことから、現在までの調査範囲内に瓦葺き建物は存在しなかったものと思われ、どこから搬入されたかが問題になってくる。遺跡内部に瓦葺き建物が存在した可能性が低い現状では、背後の丘陵に存在する旧北辰中学校瓦窯跡を供給源と考えるのが妥当であろう。

以下では、下の西遺跡出土の瓦と胎土・焼成・整形技法などの諸特徴が酷似する、旧北辰中学校瓦窯跡・八幡林遺跡出土資料も含めて紹介したい。

（下ノ西遺跡）

軒丸瓦　既調査分を含めて、軒丸瓦は102が唯一であった。小破片のため詳細な型式は不明だが、２枚の蓮弁が確認できる。裏面には、丸瓦との接合痕が観察される。胎土には細かい砂粒を多く含み、酸化炎焼成のため淡黄褐色を呈する。

丸　瓦　過去４年間で５点が出土している。他の瓦とは異なって良く焼きしまり、暗灰色～暗青灰色を呈するものが多い。全ての資料の凹面には布目痕が観察され、凸面のナデ調整や分割面の面取りなど、作りは比較的丁寧である（110～111）。

平　瓦　過去４年間で36点が出土している。赤褐色～淡黄褐色を呈する焼きがあまい資料がほとんどで、良く焼きしまったものは、２点（約5.7%）を数えるにすぎない。風化で確認できないものを除き、全ての資料（凹面）に布目痕が観察されるが、104のようにナデ調整が加えられ、部分的にしか残さないものもある。凸面は、全て叩きが施されており、叩き目の種類には、①長方形の細かい格子（103～105･108）･②粗い方形の格子（109）･③平行叩き（107）･④細かい斜格子（106、平行叩きと併用）の４パターンが確認できる。②が施されるのは、厚手のものが多い。

（旧北辰中学校瓦窯跡）

旧北辰中学校瓦窯跡は、昭和27年の校舎建設の際に丘陵を削平したことで発見された。その明

確な位置は不明だが、発見者である寺村光晴氏は「現在の和島保育所の裏側斜面の中段～下段にかけてである」といわれている（和島村1996）。

本窯跡出土資料は、移転後の北辰中学校に保管されているのが平成９年に再発見され、図面12～13に掲載したものがその一部である。資料の裏面に、「４．17　CT　二層」などと墨で注記されたものがあり、発見の経緯がうかがえる。総量では、丸瓦８点・平瓦20点の合計28点（約6.6kg）が現存するが、軒丸瓦・軒平瓦は含まれていなかった。

丸　瓦　良く焼きしまり暗灰色～暗青灰色を呈するものと、焼きがあまく淡赤褐色～灰白色を呈するのがある。両者の比率は、１：１（４点：４点）で等しい。焼成時の高温のため大きく焼き歪んだ120の存在は、窯跡出土資料であることを如実に物語っている。風化のため確認できない２点を除き、凹面には布目痕が観察され、凸面のナデ調整・分割面の面取りは丁寧である。

平　瓦　良く焼きしまり黒灰色～暗青灰色を呈するもの４点(20%)、焼きがあまく淡黄褐色～灰白色を呈するもの16点（80%）である。焼成時に生じたと推定される、亀裂・剝落が観察されるものもある。いずれも凹面には布目痕跡が見られるが、ナデ調整により部分的に消えている場合が多い。このほか、布綴痕（114）・粘土板の合わせ目（117）等が観察される。凸面は、全て叩きが施されており、叩き目の種類には、①長方形の細かい格子(114～117)、②粗い方形の格子（118～119）の２種類が確認されている。①の叩きが施された瓦の厚さが35～40㎜であるのに対し、②が見られる資料は15～25㎜を測る薄手のものが多い。

（八幡林遺跡）

八幡林遺跡は、８世紀前葉～９世紀後葉にかけて機能しており、古志郡衙関連施設と考えられている。瓦は、A地区の包含層から約10点が出土しており、軒平瓦・平瓦・丸瓦が確認できる。112の軒平瓦は、胎土に砂粒が多く混入されており、二次焼成を受けかなり脆い。有顎式になる可能性が高く、瓦当には重弧文が施されている。顎の部分は接合部で剝落しており、四重弧文となろう。113は厚みのある平瓦で、砂粒の混入は少ないが、やはり二次焼成を受けた影響で、部分的な赤変・劣化が認められる。凹面には布目、凸面には粗い格子叩きが施されている。

以上、旧北辰中学校瓦窯跡および、同窯跡の製品が搬入された可能性が高い下ノ西・八幡林遺跡出土の瓦を概観してきた。これらの瓦の所属時期については、平瓦が「桶巻き作り」技法で製作されている点からみて、８世紀前葉よりは下らないと考えられる。さらに、八幡林遺跡A地区において一緒に出土した木簡・土器の年代から類推して、奈良時代の初期に位置づけられる可能性が高い。

第Ⅲ章　ま　と　め

1．遺構について

本年度の調査における最大の成果は、7世紀後葉～8世紀初頭に機能した大溝(SD400)を発見したことである。この溝は、既調査で検出された道路遺構（SD05・301）や、東西・南北方向の溝（SD85・301）とともに、東西53m（約半町）×南北38m（約1／3町）を測る方形区画を形成しており、内側に何らかの施設の存在が予想された。JR越後線および現村道下となっているために、それ以上の調査はできなかったが、8世紀初頭以前の段階に、このような区割りが存在したことは注目に値する。Ⅰ区とⅤ区の間には、同じような溝で区画されたエリアが、複数存在する可能性もあろう。

もう一つの成果は、上記の区画外ではあるが、8世紀初頭以前に位置づけられる大型の掘立柱建物（SB29・30）を検出したことである。ほぼ同時期の建物としては、平成8年調査区のSB01・02、今年度本調査したⅤ区のSB32などがあげられ、かなり広範囲に奈良時代以前の掘立柱建物が存在する可能性が高い。当該期の遺物分布からその広がりは、遺跡の東半分（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区）全体におよぶものとみられる。

下ノ西遺跡では、従来の調査でも7世紀台の遺物が散発的に出土していたが、遺構・遺物の内容からみて、官衙的色彩を持つのは、奈良時代に入ってからと考えられていた。しかし、実際は、八幡林遺跡の成立期（養老前後）以前にも、広い範囲に掘立柱を中心とする建物群が存在していたのである。建物群の上限については、掘立柱という性格から確実な共伴遺物が乏しく時期決定が難しいが、主軸方向が一致する溝・土坑内出土遺物からみて、7世紀後葉に遡ることは確実であろう。

7世後葉～8世紀初頭段階の下ノ西遺跡は、どのような性格を帯びていたのであろうか。掘立柱建物を中心に構成され、広い範囲で棟方向を揃えている点や、1辺1mを超える大きな掘り方の存在は、官衙や有力者層の居宅と共通する特徴を示している。性格を特定するような文字資料の共伴はないが、八幡林遺跡に先行する郡（評）衙であった可能性がもっとも高く、8世紀前葉における郡関連の木簡の存在は（第1・5号）、八幡林遺跡成立後もその機能が維持されたことを示すものといえる。

この時期の北陸地方は、越国の3分割（690年頃）や越中国4郡の越後への割譲（702年）が行なわれるなど、めまぐるしい国域の変動があった。それに伴って本地域も、「越国」から「越中国」を経て「越後国」へと所管が変わっており、下ノ西遺跡がどの段階で整備されたかは、律令的な地方支配体制の施行過程を考える上で重要な問題を含むものであり、八幡林遺跡設置の意義とともに今後の検討課題といえよう。

2．土器について

本項では、下ノ西遺跡出土土器（7～8世紀前葉）の編年的位置づけについて、若干触れてみたい。これらの資料は、遺構外出土のものが大半であり、確実なセット関係が捉えられない点など問題も多いが、杯類および特徴的な器種の形態から、以下に記す3期に大別されよう。

Ⅰ期（7世紀前葉）

今回出土した土器で7世紀前葉に遡る資料としては、脚部に透かし孔を持つ高杯および、古墳時代タイプの杯H、提瓶があげられる。中でも、透かし孔を持つ高杯がもっとも古く、口径が著しく矮小化した杯Hについては、次のII期に下る可能性もあろう。

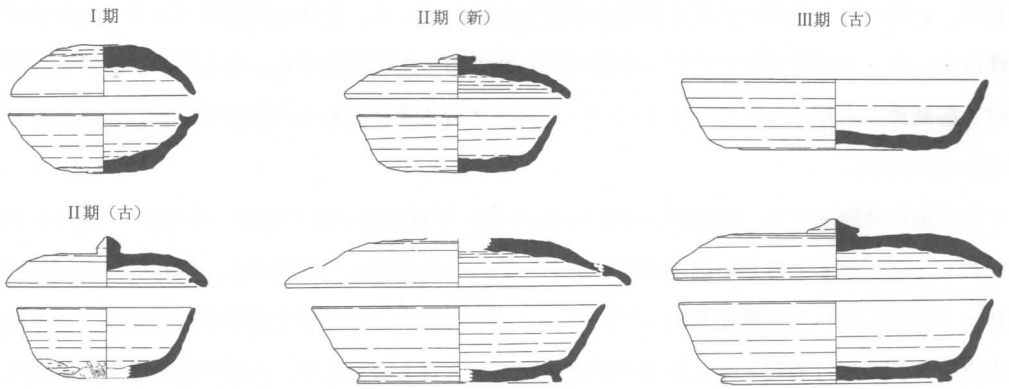
II期（7世紀後葉～7世紀末）

下ノ西において遺物の出土量が急増する段階であり、須恵器の食膳具が杯Gおよび杯Aを主体に構成される前半と、杯Bが定量含まれるようになる後半に細分できる。杯Bとセットになる蓋については、返りのあるタイプと、端部が下方に折れる形態のものが共存するが、その量比は不明である。一方、杯Gおよび杯Aの一部とセットとなる杯蓋は、いずれも返りのあるタイプである。前半は小型で宝珠形のつまみを持つのに対し、後半には法量がやや大きくなり、つまみは偏平化する。返りの形状はバラエティーに富み、その姿からは一概に新旧を決しがたいが、後半には明らかに退化傾向を示すものも現れる。

III期（8世紀初頭～8世紀前葉）

杯蓋の返りが消失した直後の前半と、杯Bを中心に器種分化が進む後半に分けられる。その前半については、明確な遺構一括資料がなく実態は不明瞭であるが、当該期の後半に位置づけられるII区SD201の資料と比較して、杯Bの法量が相対的に大きく、作りがシャープなものが主体である。量は少ないが、長岡市笹山窯の製品に類似した一群も当該期前半のものか。

以上、出土土器の位置づけについて概観したが、前項でも述べたように、掲載資料を任意抽出している性格上かなり組成に偏りがある。このため全体像の把握には程遠く、より詳細な編年については、整理作業完了後に再考したい。



第5図　各期の食膳具

第Ⅳ章　調査成果要約

1．遺構について

- 7世紀後葉～8世紀前葉および、9世紀前葉～9世紀末の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが多数検出された。本年度調査区で中心となる時期は、7世紀後葉～8世紀前葉の段階である。
- 7世紀後葉に遡る大溝（SD400）が検出された。同溝は、過去の調査で検出された道路遺構、SD85・301とともに、東西53m（約半町）×南北38m（約1／3町）の方形区画を形成しているものとみられる。
- 方形区画とほぼ同じ時期に、遺跡の東半分（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区）を中心として掘立柱建物が構築されていることが明らかになった。建物には、桁行5間•柱掘り方が1辺1mを超える大型のものを含んでおり、広い範囲で棟方向を揃えるなど一般集落のそれとは異なった様相を呈する。
- 遺跡の性格を明示する8世紀初頭以前の文字資料はないが、次段階（奈良時代前葉）の郡関連木簡の存在や、当該期の遺跡の広がり・建物規模からみて、それに先行する郡（評）衙の成立が予想される。

2．遺物について

- 県内では従来出土例が少なかった、7世紀前葉～8世紀初頭を中心とする土器が多量に出土した。
- 軒丸瓦が初めて出土した。小片のため全容は明らかにできないが、単葉の蓮華文である可能性が高い。
- 過去の調査を含め40点を超す瓦が出土しているが、既調査範囲内に瓦葺き建物が存在した可能性は薄い。瓦の供給源は、背後の丘陵斜面に所在する旧北辰中学校瓦窯跡であったとみられる。同窯跡の製品は、八幡林遺跡にも少量搬入されており、8世紀前葉の土器・木簡などと伴出している。

引用・参考文献

春日真実　1999「第4章古代第2節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院

北野博司　1988「用途からみた食膳具の組成とその変化」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

坂井秀弥　1983「越後における7・8世紀の土器様相と画期」『信濃』第35巻第4号信濃史学会

坂井秀弥ほか　1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　山三賀II遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟工事事務所

寺崎裕助　1982「窯跡」『笹山遺跡』長岡市教育委員会

笹沢正史　1999「第4章古代第2節　生産と流通　第2項　窯業」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院

山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

和島村　1996『和島村史』資料編1　原始・古代・中世

和島村　1998『和島村史』通史編

和島村　1998『今、注目される越後の古代――和島村出土木簡の意義――』

和島村教育委員会　1992『和島村埋蔵文化財調査報告書第1集　八幡林遺跡』

和島村教育委員会　1993『和島村埋蔵文化財調査報告書第2集　八幡林遺跡』

和島村教育委員会　1994『和島村埋蔵文化財調査報告書第3集　八幡林遺跡』

和島村教育委員会　1998『和島村埋蔵文化財調査報告書第7集　下の西遺跡――出土木簡を中心として――』

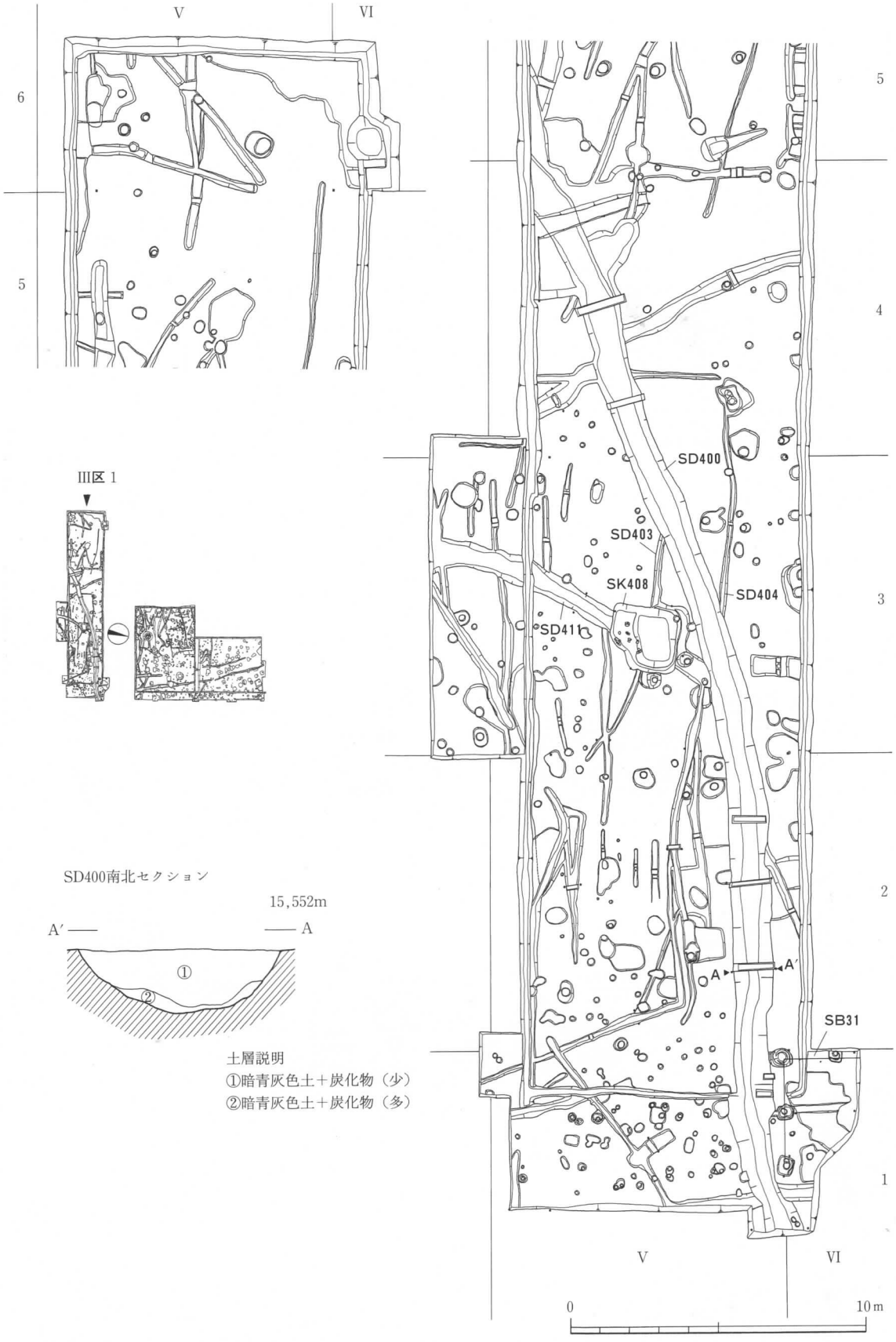
和島村教育委員会　1999『和島村埋蔵文化財調査報告書第8集　下の西遺跡　II』

図　　版

図面 1

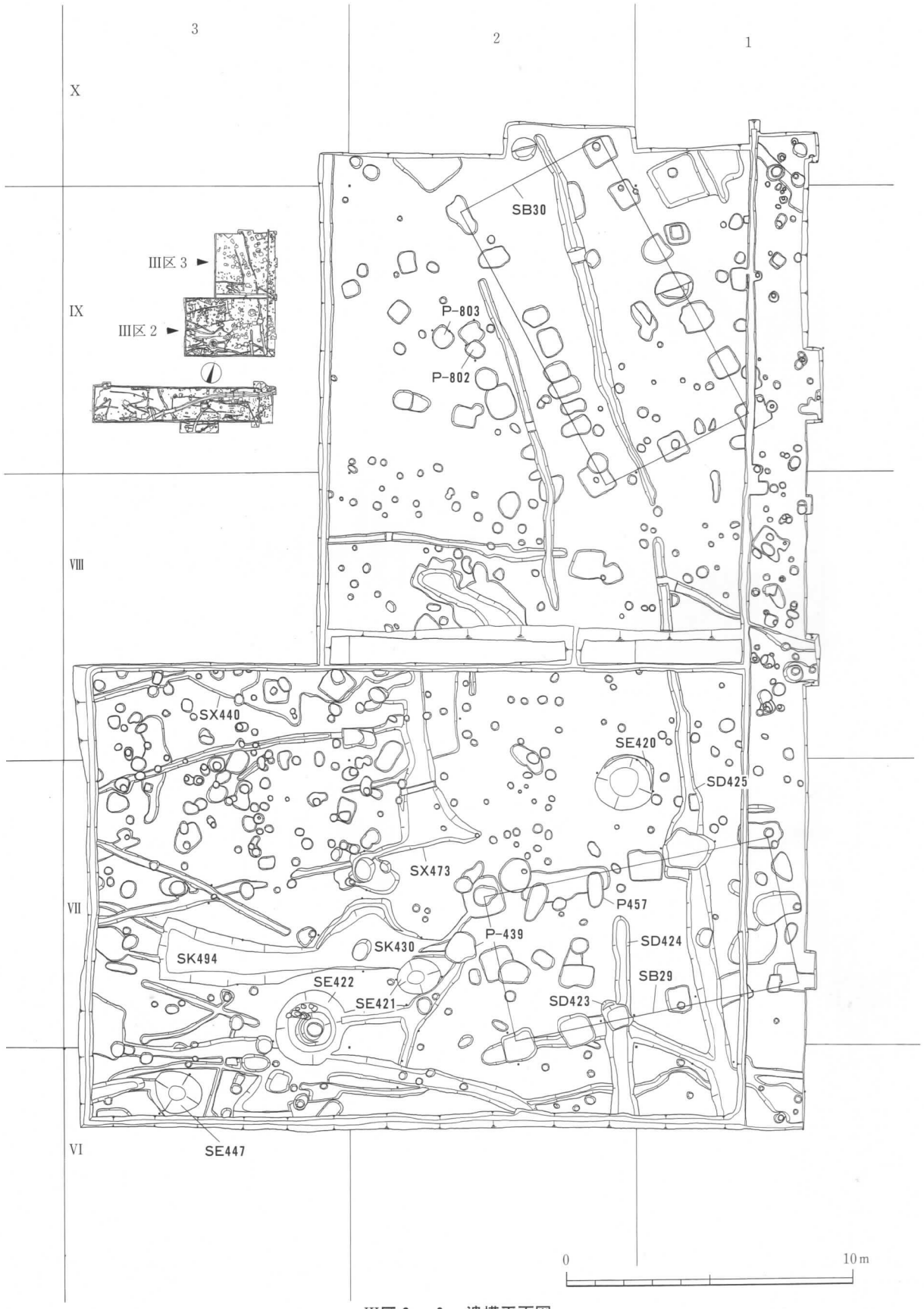
調査区位置図

図面 2

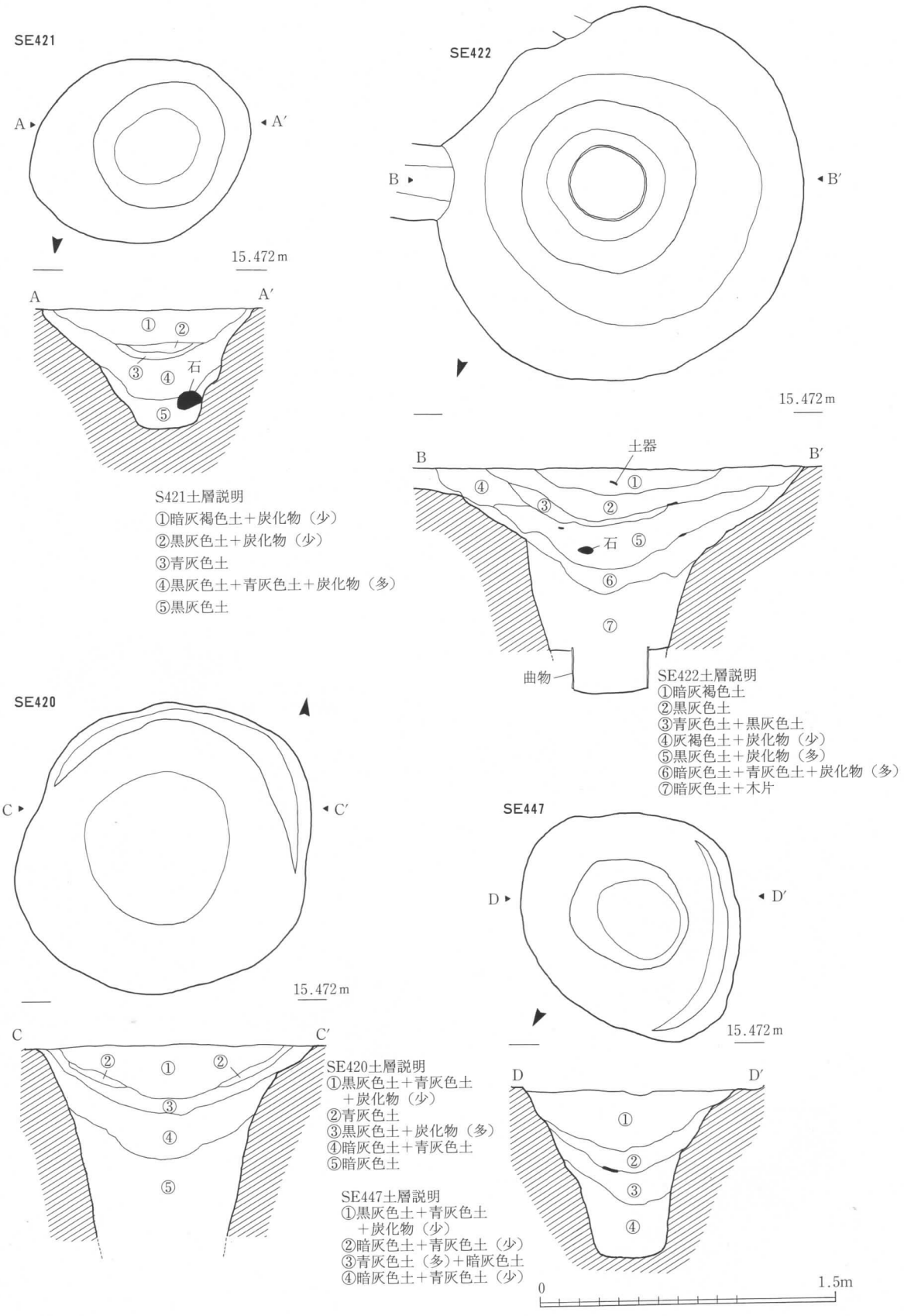


III区 I　遺構平・断面図

図面 3

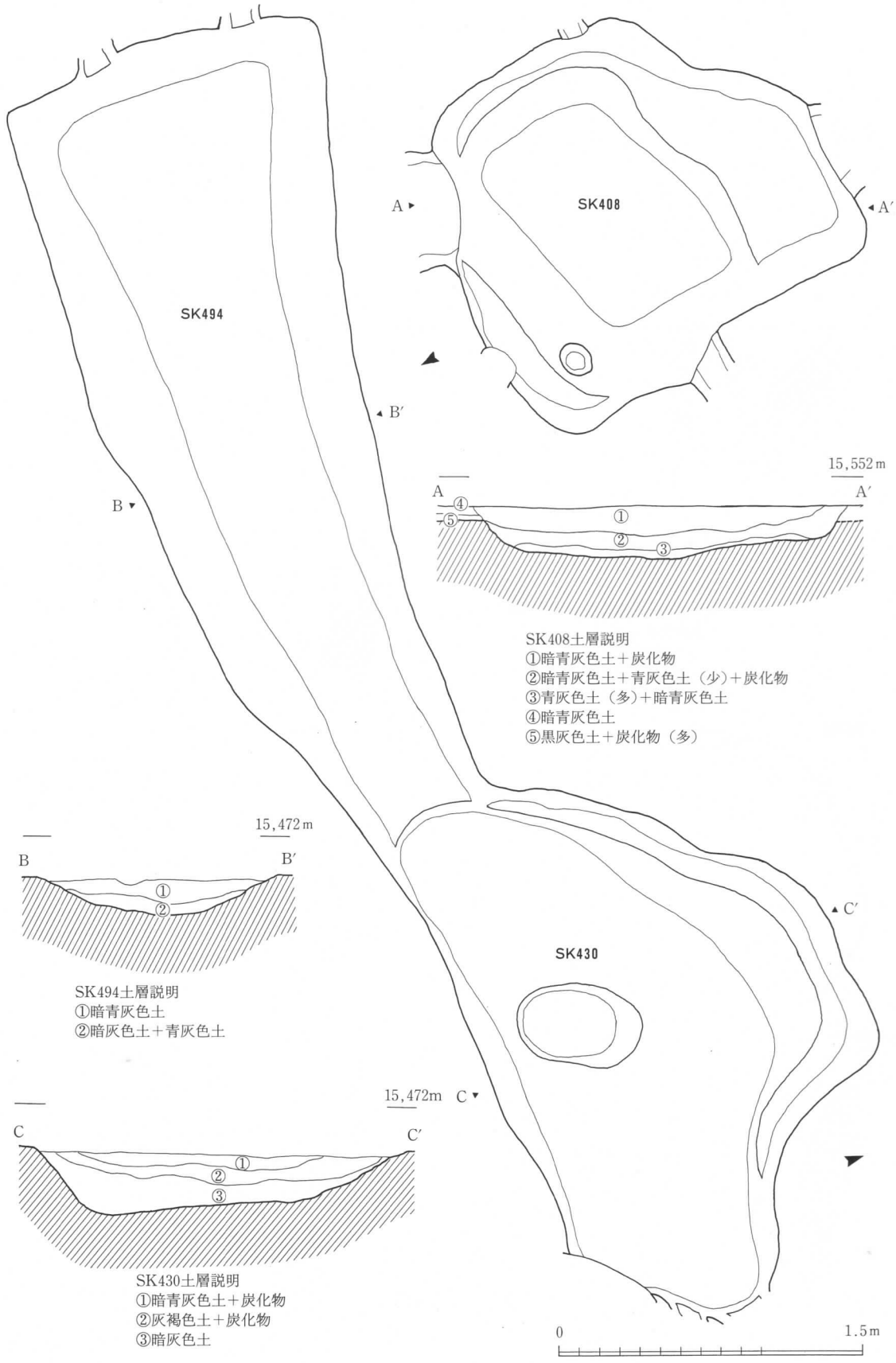


III区 2 ・ 3　遺構平面図



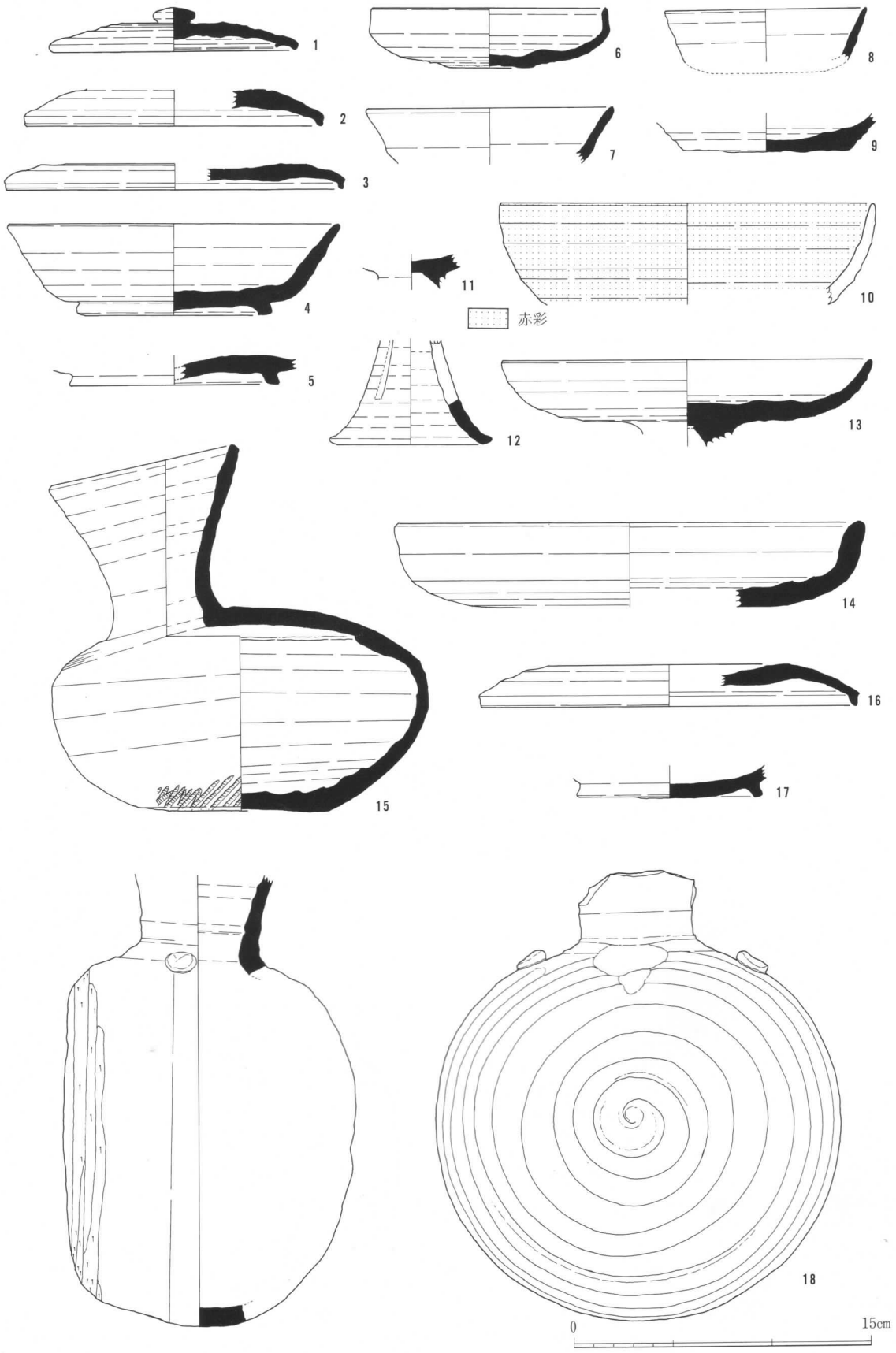
遺構平・断面図（III区１・２井戸）

図面 5



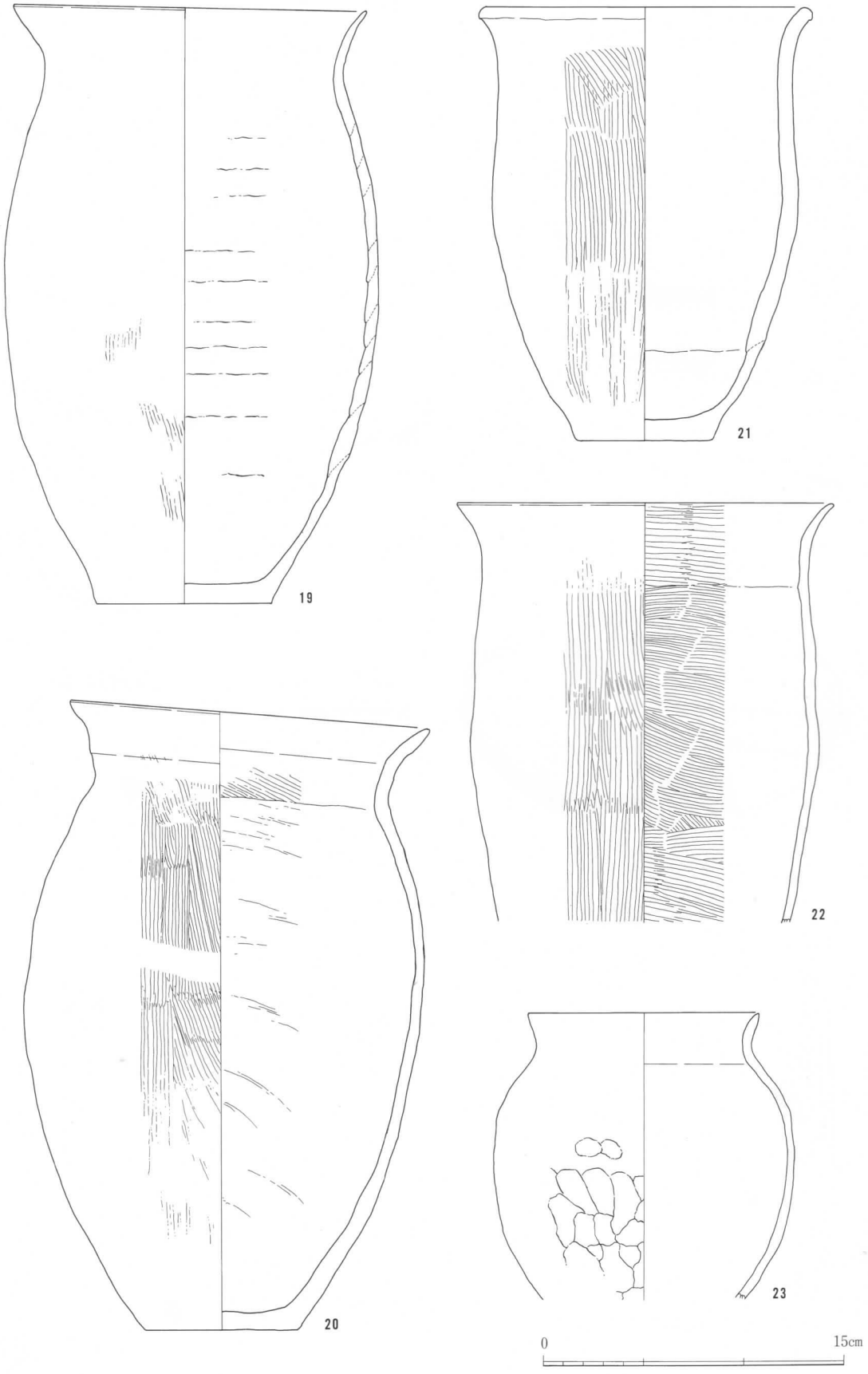
遺構平断面図（III区1 SK408・III区2 SK494・III区2 SK430）

図面 6



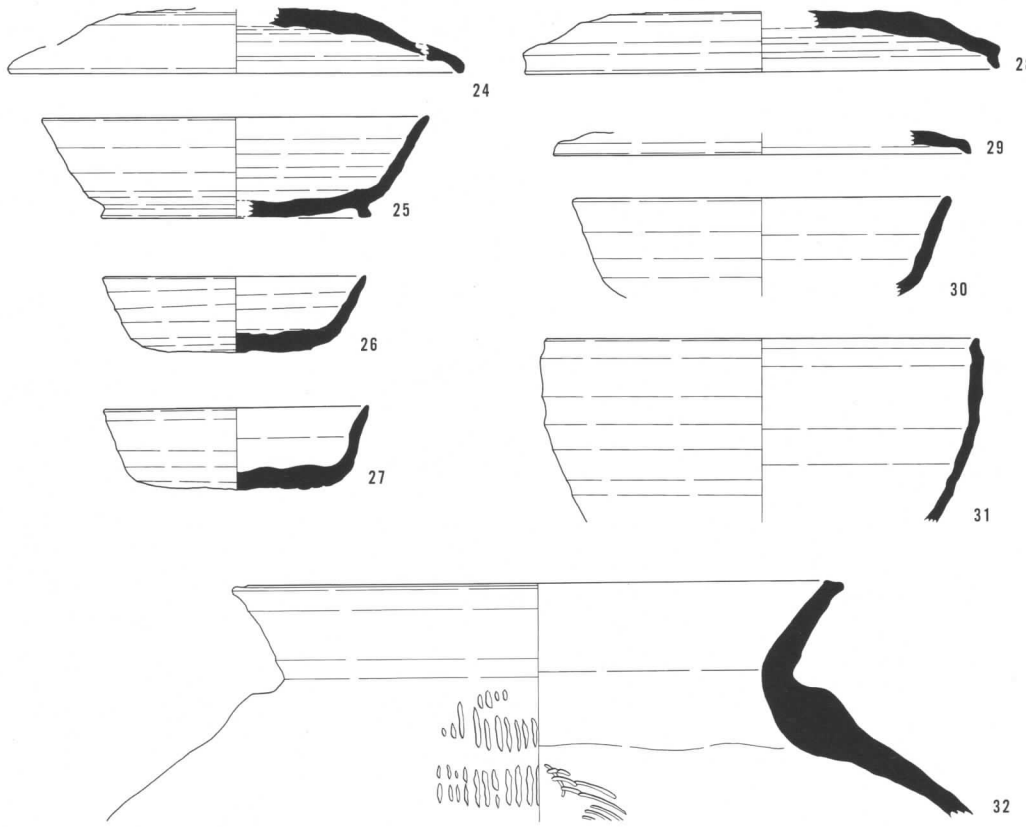
出土遺物（15 P-802、16～17 SK408、その他 SD400）

図面 7

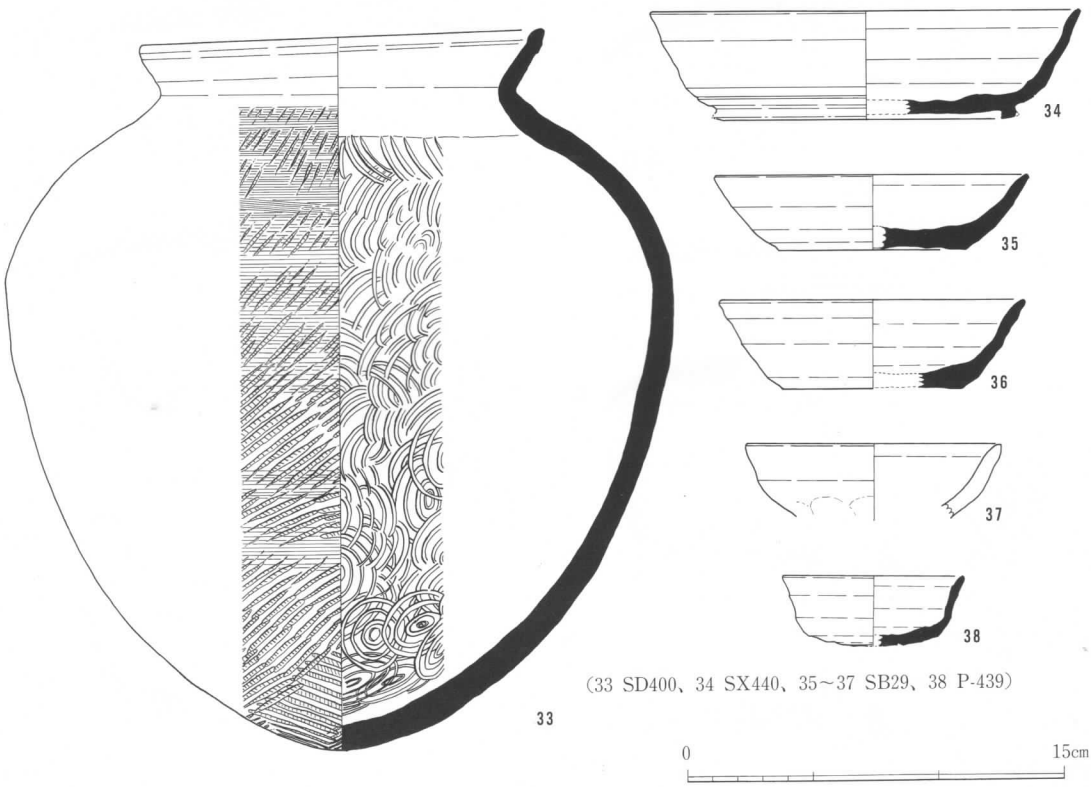


出土遺物（SD400）

図面 8



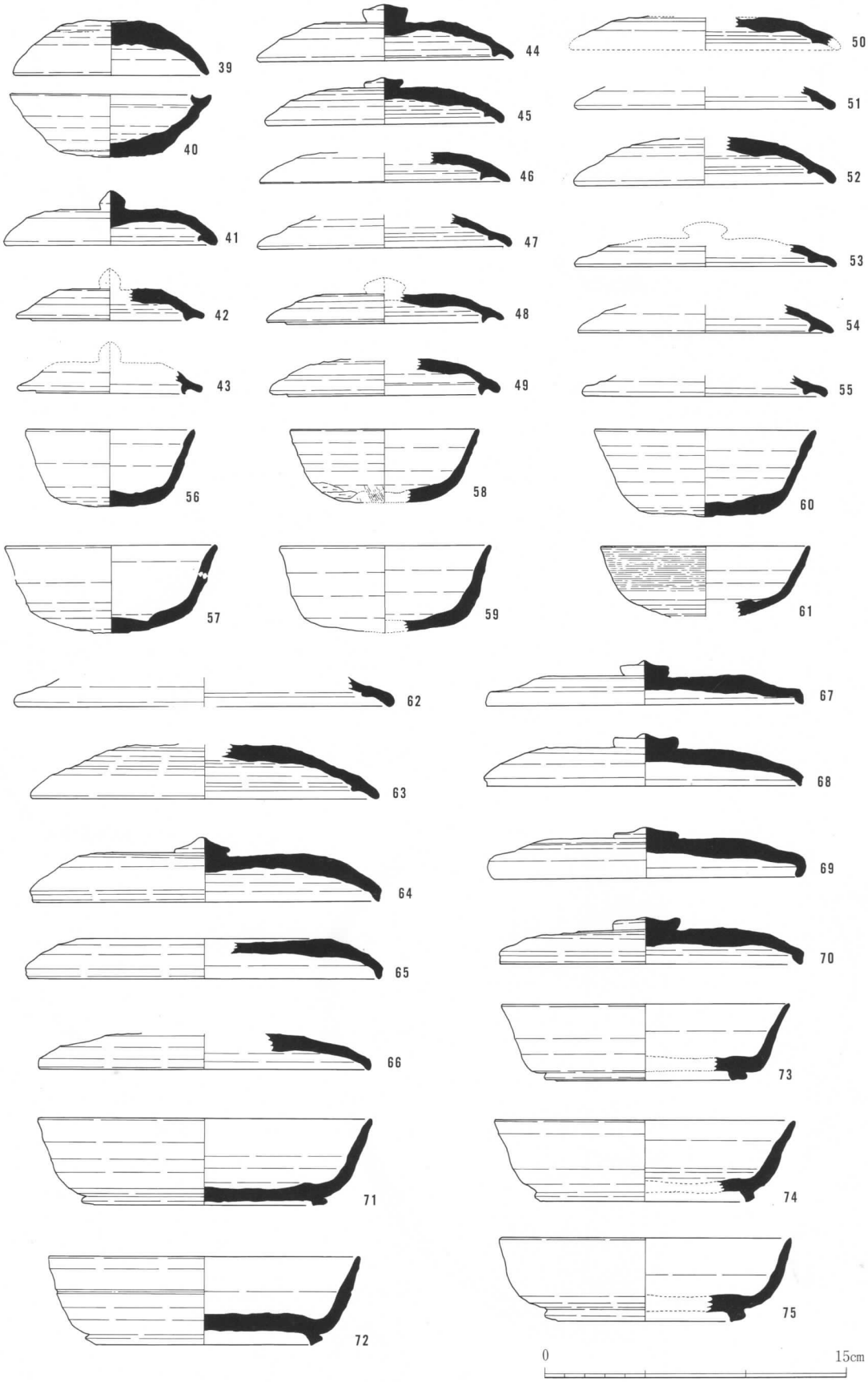
(24～26 SK494 27 P-803、28～32 SK430)



(33 SD400、34 SX440、35～37 SB29、38 P-439)

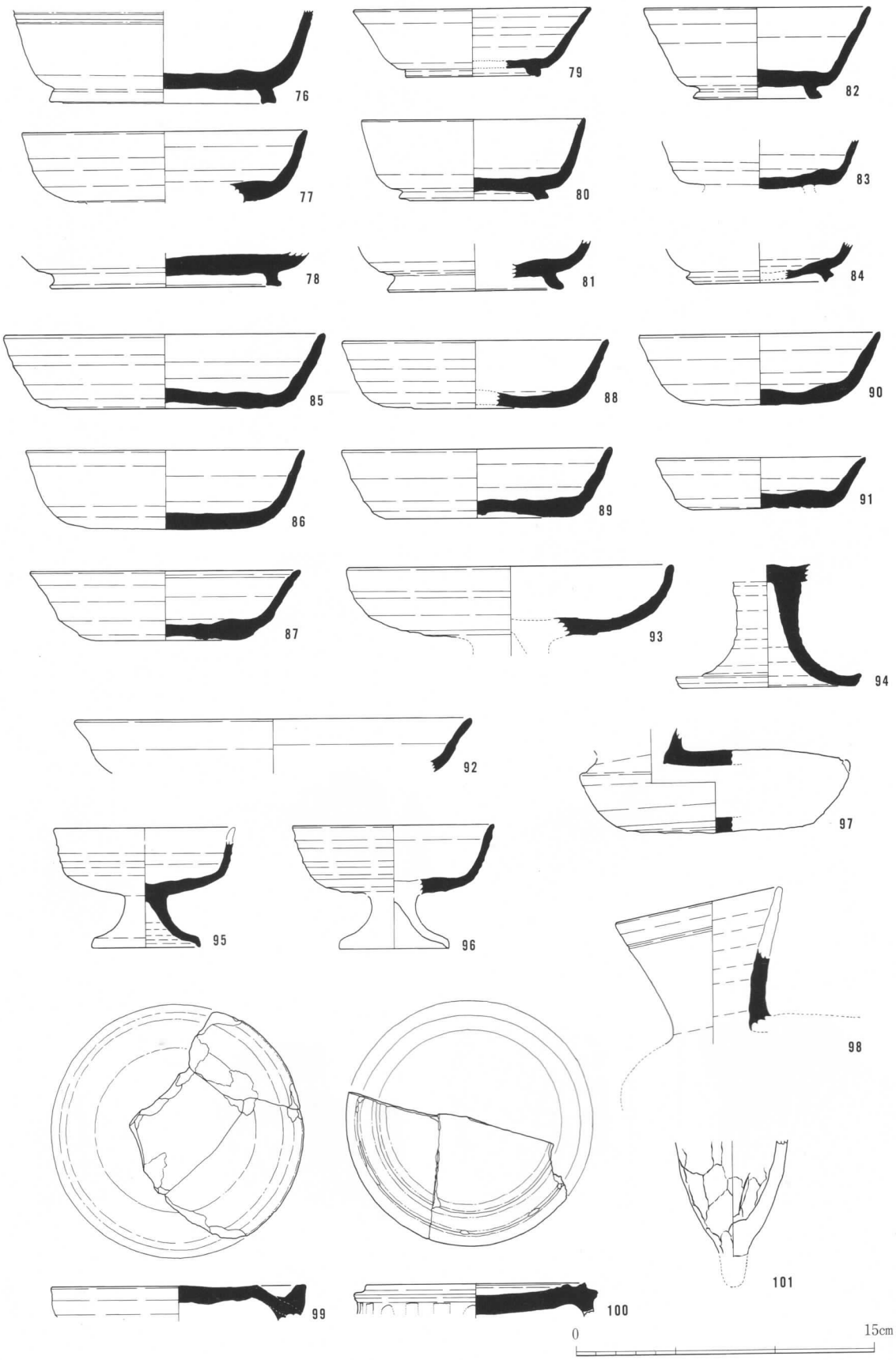
出土遺物

図面 9



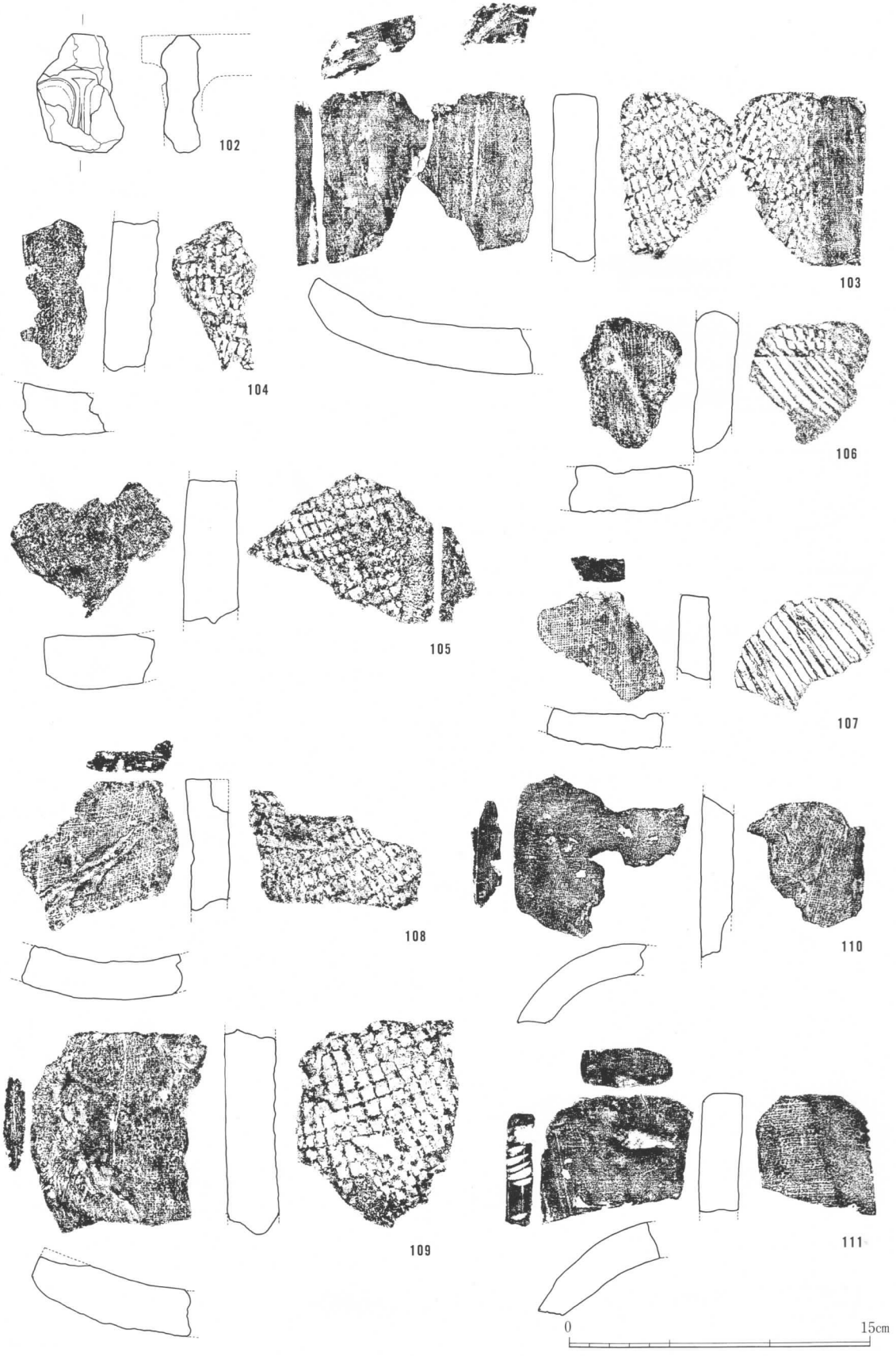
出土遺物（遺構外　41・49 98年Ⅰ区、40・42・64 Ⅴ区、その他 Ⅲ区）

図面10



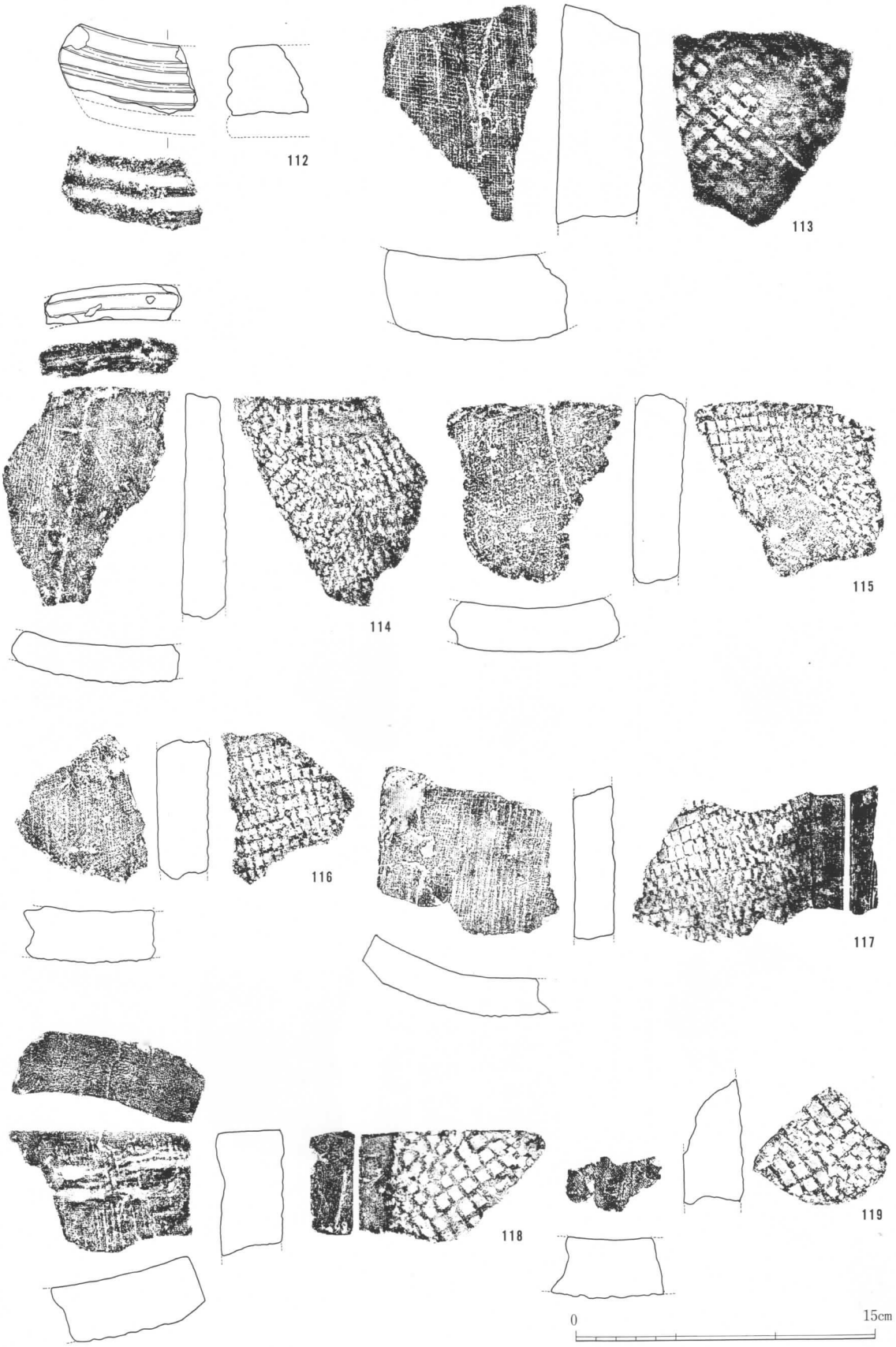
出土遺物（遺構外　101 96年Ⅰ区、100 Ⅳ区、その他 Ⅲ区）

図面11

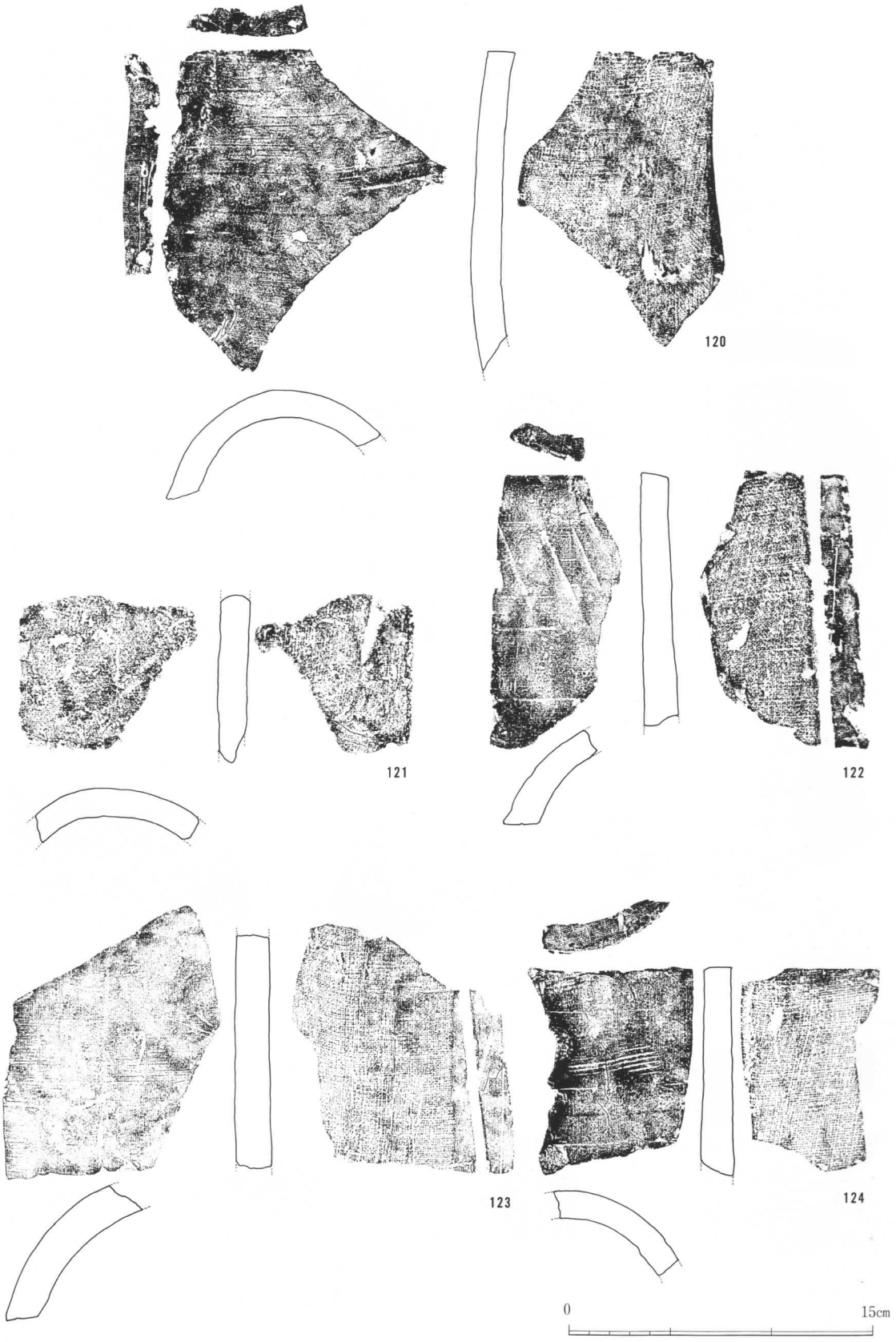


出土遺物（111 96年Ⅰ区、103・108・110 Ⅴ区、その他 Ⅲ区）

図面12



八幡林・旧北辰中学校瓦窯跡出土瓦（117～112 八幡林A地区、その他 瓦窯跡）



旧北辰中学校瓦窯跡出土瓦

図版 1

下ノ西遺跡全景（▲北→南　▼南→北）

図版 2

III区 1 ～ 3　空中写真

図版 3

▲III区 2　SB29・SX473　▼III区 3　SB30

図版 4

▲III区 1　SB31　◀III区 2　SE421　土層断面　▼同　SE447　土層断面

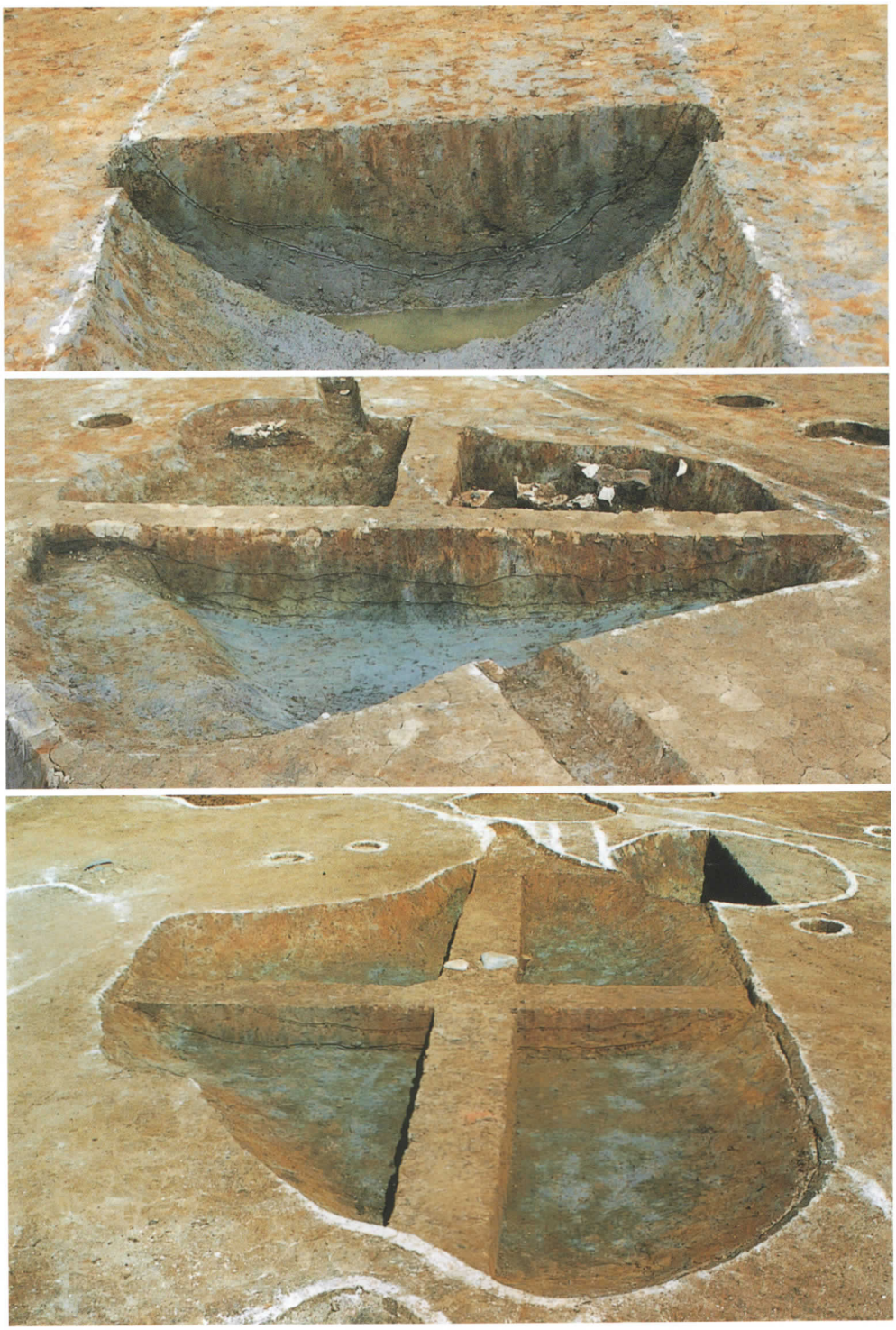
図版 5

▲III区 2　SE422　土層断面　◀同 上面礫出土状況　▼同 完掘状況

図版 6

▲III区 1　SD400　◀同 甕出土状況　▼同 提瓶

図版 7



▲III区 1　SD400　土層断面　◀同 SK408　▼III区 2　SK430

図版 8

▲III区 3　P-802　遺物出土状況　◀III区 1　平瓶　▼同　緑釉

図版 9

出土遺物

図版10

出土遺物

図版11

39
41
45
44
40
42
48
52
56
58
60
61
63
67
70
64
69
68
65
71
72
74
77
80
82
85
91
86
93
97
94
95
99
100
101

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しものにしいせき
書名	下ノ西遺跡　III
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	田中　靖
編集機関	和島村教育委員会
所在地	〒949-4511　新潟県三島郡和島村大字小島谷3434番地4　TEL 0258-74-3111
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
下ノ西遺跡	新潟県三島郡和島村大字小島谷	154041	16	37度 34分 16秒	138度 46分 15秒	1999.5.7 ～ 1999.12.9	約1,500	県営圃場整備事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下ノ西遺跡	官衙跡	古墳時代～平安時代	掘立柱建物3棟 井戸　4基 そのほか土坑・道路・溝など多数	須恵器・土師器・瓦・製塩土器・鉄滓・墨書土器・耳環	・8世紀初頭以前に遡る可能性が高い、大型の掘立柱建物・区画溝などが検出された。 区画溝は、既調査で検出されている道路・溝を伴って、東西53m（約半町）×南北38m（約1／3町）を測る方形区画となる可能性が高い。

和島村埋蔵文化財調査報告書第9集

下　ノ　西　遺　跡　III

平成12年3月27日印刷
平成12年3月31日発行

発行　新潟県和島村教育委員会
印刷　㈱　第　一　印　刷　所
新潟市和合町2丁目4番18号
電　話　（025）285－7161